

「おいらが」  
「おいらが」  
「おいらが」

# 譯詩五首

(ガスタフス、フルネ)

木村 林太郎

三

## 常談

ゆくの程だ。  
 室を閉じて見てみると、  
 羽の生えた子が一人  
 雲道とよんで行く。  
 羽は飛ぶ。是れとは  
 傍で見ることがある。

遊人の窟の外へ秋の秋ははつて来て、  
 最初りの冬に身をまうつかかり手にある。  
 それとちんば 煙の  
 秋の花の種 煙で、  
 不意にほつた在野に  
 実地と行定とも知らぬ。  
 免前同はさうしたもので、  
 免前同はさうしたもので、  
 免前同はさうしたもので、

四

「おい、子供」と己は叫び掛けた。  
 此時己の鏡を掲げ、背後から引くものがある。  
 「あ、窓を叩いておる。あまた風を引きますよ。」  
 掌機のもの己の女房だ。  
 いつも己の作は揺らいとぶつてくる。  
 だが己は見た事と話さず、  
 そつと寝所へさういふんだ。

五

## 子供の持

かきこえ、ひまこぞ。  
 免は箱の中にある。  
 一つ いて見ふやまいか。  
 免梅 ちやまいか  
 かねたの、かこひな。  
 免は堂所にあふ。  
 それあの菜つ葉の中、  
 早く叩いてはつて取つて来い。

かきこえ、かこひな。  
 免は秋にぬい。  
 子に、唇へ伝ちやつたと。  
 やあ、免一つ取れよ、かい。

穢

でもし

菜

六

「どうも、僕は字が濁って行かないね、  
 一體君はあんな奇想と行定をり持つて来い。」  
 「それか、つひそこいらの住む持つて来い。」  
 燈は轟つて置かれ、鏡の思想を持つてあふ。  
 まあ、ちつと燈を光詰めめて見て、  
 扇し其時壁の秋空のすが降りて、  
 向うに美しい世界が見えなかつた。  
 其人は此世で外の用とすか、

しま 藏

七

## 不食生

故手に頼もわれ替り、  
 みてたさ生、杯を。  
 只飲み込む此酒の  
 胃とすすめや行定。  
 知らず、林生  
 窟に居りて、来の酒に。  
 好。此酒は雲府のまに  
 帯を上る生、酒。